

優 秀 賞

「 内なる声に導かれ、『問い』が私を強くする。 」

公共学科 3年 佐藤 碧

私は3月まで、福島高専ビジネスコミュニケーション学科で経営学を専攻し、地域のスポーツがまちづくりや人々の心に与える影響に魅力を感じていました。卒業論文では、リレーションシップマーケティング・サービスマーケティングにおけるスポーツマーケティングを深掘りし、この分野への熱意を募らせていました。しかし、高専4年に進級した頃、「本当にこの道で良いのだろうか」という漠然とした不安が心に影を落とし始めました。

そんな時、図書館で偶然手に取ったのが、苫野一徳と多賀一郎両氏による『問い続ける教師』でした。「自分の“ほんとう”に根ざした問いこそが、学びを動かす」という一節に、私は強い衝撃を受けました。それまでの私は、与えられた課題をただこなすだけで、自分自身の内なる「問い」に真剣に向き合っていなかったことに気づかされたのです。

この気づきは、私の人生を大きく変えるきっかけとなりました。より自分らしい学びを追求するため、私は大学への編入を決意しました。編入試験に向けては、TOEICと経営学の学習に集中的に取り組み、語学力と専門知識の双方を徹底的に強化しました。結果的に第一志望の大学には届きませんでしたが、現在、私はスポーツと地域を繋ぐ学びの日々を送っており、深い充実感を味わっています。

本書との出会いは、単なる知識の習得にとどまらない、私の学びの根幹を揺さぶる体験でした。それは、絶えず自分自身に問いを立て続けることの重要性、そしてその問いに真正面から向き合い、自らの答えを深く探求する勇気の尊さを教えてくれました。この教えは、私の進路を決定する上での揺るぎない羅針盤となりました。周囲の期待や社会的な価値観に流されることなく、自分自身の内なる声に耳を傾け、心から納得できる道を選ぶ力を授けてくれました。

この本は、学びの姿勢を根本から変え、未来を切り拓く力をくれました。これからも「問い」と共に学び続けます。